

「中学生の主張に接して」

田村 恭一

「学びて思わざれば則ち罔^{くら}し、思いて学ばざれば則ち殆^{もや}うし」という孔子の言葉がある。＜罔い＞とされるのは、理解したような気になるだけだからであり、＜殆うい＞のは、独断的・独善的になりがちだからである。前者からは二番煎じの退屈なものしか出てこないし、後者から出てくるものは聞きづらい。大人の主張は、前者か後者のどちらかに傾きがちである。

教育委員という職務上、中学生の書いたもの、口頭発表のものに接する機会があるが、秀逸なものが多い。それらの主張には、新鮮さ・独創性があり、かつ共感を誘う社会性・普遍性がある。「学ぶ」と「思う」のバランスが、良く取れているわけである。このバランスの良さに、中学生の心と思考との柔軟さが端的に現れているように思われる。柔軟さゆえの苦悩もあろうが、いつまでもそれを持ち続けて欲しいと願わずにはいられない。

こうした中学生の主張に接すると、新しい社会を創ってゆく新しい世代の確かな成長を実感することができる。新しい世代の持つ可能性は、旧い世代にとっては希望となる。彼らの主張を、何らかの形で、町民の方々に広くお目にかける機会があればと思う次第である。